

## 女性胸部外科医へのアンケート

富永隆治(九州大学大学院循環器外科)

医師不足が社会的問題になっている。心臓大血管、肺・縦隔、食道といった、手術の難易度が高く、術後の管理も高度の判断が要求される、いわゆるハイリスクの胸部外科領域でも例外ではなく、仕事量の増加に比し若い医師の参入は少ない。このため胸部外科学会では臨床現場での若手医師の過重労働を改善するために種々の方策を検討してきた。その1つとして、女性医師の胸部外科領域への参画を促すため、胸部外科医処遇改善委員会のもとに、「女性医師の労働環境を考える支援ワーキンググループ」が作られた。女性医師は年々増加の一步をたどり最近では卒業生の30%を占めるようになった。全体的に見ても15%程度が女性医師であるのに対し、胸部外科学会では女性会員は全会員の5%にも満たないためである。

小生はその担当となり、まず、女性胸部外科医に対し、現状の把握と彼女たちの意識調査を目的にアンケートを行った。回答者の半数は心臓外科医であり、ほかの半数は主に呼吸器外科医で年齢層は30歳代が過半数で未婚率は60%であった。結果として特筆すべきは彼女たちの胸部外科に対する思いの強さであった。これは小生の予測をはるかに超えていた。男性医師でもハードとされる胸部外科を「やめたい」と答えた人はわずかに3%、胸部外科を選択して後悔しているかとの問いには83%が「していない」とし、もう一度医師になってどこかの診療科を選択するとしたらとの問いに、43%は胸部外科を選択すると答え、選択しないと答えた医師数(全体の34%)を超えていた。そこには胸部外科の仕事に生きがいを感じ、

決して良好とはいえない労働環境の中、苦しくとも、一流の胸部外科医になろうとする女性胸部外科医の強い意思が感じられた。いったん決めた道を、仕事が予想より厳しいというだけで、安易に変更しようとする軟弱な若い男性胸部外科医に、その爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいぐらいである。

学会の推薦評議員女性枠、あるいは理事会における女性枠の設置に関しては、「必要である」「不要である」が半数ずつで、女性ということで特別に枠を設けるのではなく、きちんと評価したうえで役員に選んでほしいという意見が目立った。専門医資格、正会員資格に関しても男性医師と同等でよいとするものが90%を越えていた。ここには女性というだけで条件を甘くしてほしいという要求は微塵もなく、凜とした、芯の強い日本女性の姿が浮かび上がる。この一方、学会の女性医師に対する支援策は必要とするものが80%を超え、特に妊娠、出産、育児に関連して、フレックスタイム制の導入をはじめとして、職場の労働環境整備(託児所の設置、子育て支援など)を訴える意見が多かった。

学会はもちろんのこと、それぞれの病院においても、これらの意見に真摯に耳を傾け、労働条件を改善し、女性胸部外科医が出産、子育てをしながらでも仕事が続けられるように早急に対策を講ずべきである。優秀な母親から優秀な子どもが産まれることは自明の理であり、胸部外科領域の窮状を救うだけでなく日本の屋台骨を背負う優秀な子どもたちを育てるという意味からも重要と思われるからである。